

<小学生・中学生・高校生の意見発表>

災害王国日本を見て

竹島小学校 6年 小 山 海 華

海華さんは、何事も意欲的に取り組み、自分のことより友だち、先生のことを考えて動くことができる優しさをもっています。そのため信頼も厚く、後期児童会役員にも選ばれました。また、常に目標を持って前向きに取り組む姿はみんなのお手本となっています。

4月中じゅん、夜 10 時過ぎに熊本で震度 7 の強いゆれが観測されました。突然のことで、人々が戸惑っている最中に、また余震。そして、またすぐに。夜が明けてもその余震が止まることはありませんでした。すぐに避難をしても物資が届かず、いつもと同じだったはずの今日が、地震によって大きく変わってしまいました。

震災が起きてまず困ることは、物資だと思います。熊本の震災で、一番に物資を届けようとしたのは、トラックだそうです。トラックに生活必需品をのせ、運ぼうとしました。しかし、震災による被害は想像以上に大きく、土砂崩れや、道路が割れて車が通れなくなっているほどでした。結局、物資を運ぶことができたのは、そうした被害にあっていない場所にある避難所だけでした。よって、一生懸命物資を運ぼうとしましたが、その多くは運ぶことができませんでした。

すると、次に立ち上がったのは、全国から熊本のために何かしたい、自分たちにできることがあれば手伝いたい、という思いを胸にやってきた千人以上のボランティアの方々です。ボランティアの方々は、がれきをかき分け、地域の人たちとも交流しながら一生懸命働きました。物資を届けるという課題も、

これまで物資が届かなかった避難所にも届けることができるようになりました。

私は、このようなニュースを見て、日本は被災者の方々のことを第一に考えることができる心優しい、温かい国なのだと思います。私も誰かが困っているときに、すぐ手を差し出すことの出来る、優しく、平和な心をもちたいです。もうこれ以上、災害や震災などは起こってほしくないけれど、今回のようにもし起きてしまっても、すぐに助けを出せる日本は、立派でカッコいいと思います。日本は、世界中でも有数の地震災害王国らしく、また、これまでに何度も苦しく大変な思いをしているからこそ、すぐにえん助体制を整えることができているのだと思います。私も日本全国と言う広い視野でなくとも、家族や友だち、先生や地域の方のためにできることを精いっぱいやっていきます。



とても小さなことですが、私は熊本に支援金を送りました。インターネットで熊本産の食べ物を買々と、そのお金は熊本へ送られます。このたった数千円でも、熊本の方の笑顔につながると思うと、嬉しい気持ちでいっぱい

いになりました。ボランティアには行けなくても、遠くから応援している気持ちが届けられたような気がしました。

北九州地方では、自然災害も多発し、地震のショックやがれき処理が重なり復興でき

ていません。それでも、みんなが毎日がんばっています。私も、これからも応援する気持ちを忘れず、みんなが笑顔でいられるような強く優しい立派な日本を見ていきます。

我が家の支えん大作戦

三谷東小学校 6年 田 端 莞 和

莞和君は、サッカー部のキャプテンとしてチームを引っ張って来ました。探究心旺盛で、授業中でも積極的に発言するよう心がけています。また、困っている人を見かけたら、放っておけない強い正義感の持ち主です。

今年の春、九州地方をしん度7の巨大地震がおそいました。テレビに映る様子を見ると、熊本城がこわれたり、大きな橋がくずれ落ちたりして、悲さんな状きょうでした。僕がテレビの向こうにいる人たちの立場だったら、まず何を求めるんだろう、そして、僕には何ができるんだろうと思いつつ、ふとテレビのチャンネルを変えると、ぼ金や、支えん物資を呼びかけるCMがやっていました。これなら、僕にもできるかも、と思いました。

その日の家族団らんのときに、熊本の人たちに支えん物資やぼ金を集めて、送ることができないか家族に話してみました。

「福岡にお父さんの両親とお姉さんが住んでいるからいいんじゃないか。」

「お母さんも熊本の友達がいるし、賛成。」

小学校4年生の妹も

「テレビに映っていた子が、一人でいるところ、かわいそうだから、やろっ。」

家族全員が、僕の考えに賛成してくれました。

早速、家族で何ができるか話し合いました。作戦はみんなで支えん物資を集めて、ぼ金によって集まったお金で送ろうというものです。僕はぼ金箱を作り、お母さんのおばあちゃんがやっているクリーニング店の店先に置かせてもらいました。また、僕の友達にも支えん物資としてもらえる物はないか聞いてまわりました。妹と母は、妹がやっている習いごとの先生にお願いして、教室に通っている生徒さんに支えん物資を分けてもらえるようお願いしました。



一週間もしないうちに支えん物資は僕の予想以上に集まりました。歯ブラシ、ティッシュ、紙おむつ、おかし、ベビー用品など、200点以上、重さで言うと、60kgをこえるものでした。ぼ金のほうも2500円ほど集まり、送料も十分でした。この大量の支えん物資を熊本のとある保育園の関係者の方あてに送りました。

数日後、送った先の女性から自たくに電話がありました。

「たくさんの支えんありがとうございます。
まだ、近所の薬局が営業していないので
でも助かりました。」

「送ってもらった物は、大切にに使わせていた
できます。」

母が手にした電話から、嬉しそうな女の人の
声が僕にも聞こえてきました。このとき、僕
は一人一人のちょっとした優しさをたくさ
ん集めれば、すごく大きな力と元気をあたえ

ることができるんだと思いました。

九州地しんのひ害のあとは、テレビでもま
だまだ見られます。でも、少しだけ笑顔で
過ごすひ災者のかたを見ることができまし
た。そんなとき、僕と家族の行動が役に立っ
たのかなと、ちょっとほこらしく思えました。
このことを通して、助け合い、共に生きてい
くことの大切さを考えることができました。

嫌いなことば

蒲郡中学校 3年 竹内 麻衣奈

麻衣奈さんは、自分の弱さや負けそうな自分と真剣に向き合える人です。仲間に温かく、
一人一人に気を配れて信頼は絶大です。テニス部では、日々の積み重ねを大切に、県大会
5位入賞を果たしました。後期は生徒会会計となり、縁の下の力持ちとして蒲中を支えてい
ます。

「麻衣奈はいいじゃん。」

友達に言われるこのことばが私は一番嫌
い。いいことばにも聞こえるこのことば。そ
れを言われるたび、私は感じることもある。
私は自分のなりたい自分になれるよう努力
をしている。それなのに…

「元からできるんでしょ。」

って簡単に言われることがある。私は、いや
みだって感じてしまう。こうってしまうの
は私だけなのかな。

「じゃあ、その分の努力をしたの。」

と私は勇気を出していって見た。でも、その
返事は

「はいはい。そう言っても元からだもんね。」
とスムーズに流されてしまった。私の今まで
の努力を全否定されたように思えた。今まで
に経験ないくらい悲しい気持ちになった。そ
の後もその気持ちは消えることはなかった。

家に帰ってからももやもやが取れなかった。
お風呂で大声を出して歌った。大きな声を出
したい気分だった。こうってしまうのは私
だけなのかな。

勉強の話のときに出てくる私の嫌いなこ
とば。

「麻衣奈は元から私より頭がいいからいい
じゃん。」

「勉強しなくても私な
んかよりいい点とれ
るもんね。」

ああまたこのことば
か。私は心の中で

「私の気持ちを、いつになったらわかってく
れるの」と心で叫んだ。「どうせお世辞でし
よ。」「それって本心なの。」と疑うことばか
りが私の頭の中に浮かんでくる。友達を疑う
ことしかできない。そんな自分が一番嫌だっ



た。私の嫌いなことばで自分のことが嫌いになってきた。そんなふうに思っちゃいかん。でも、実際には友達はどう思っているんだろう。わからない。マイナスに考えるのはやめないと。私の中のいろんな私があふれてきた。

自分の嫌いなことば。私は人に言っていないと思ってた。

「あなたはいいとこたくさんあっていいじゃん。」

私が発したことばだった。友達には、本当に思っていたことだけど、もし自分が言われたらやっぱりお世辞に、いやみに聞こえてしまう。私はそんなマイナスにばかり考えちゃう。けど、もしかしたら相手はプラスに捉えてくれてるんじゃないか、と内心願ってみる。なんであんな言い方をしてしまった、もっといいことばを選択できたはずなのに、という後悔が止まらなかった。でも、言った側の気持ちが少しだけわかった気がした。本当の気持ちまでは難しいけれど、私が言われてきたことばにもほめことばがあった。けっこうあったのだと気が付いた。それでもやっぱり

あのことばだけは好きになれない自分がいる。この気持ちは私だけなのかな。

それからの私は、自分のことばに気を付けた。嫌いなことばは、やっぱり言いたくない。でも、本当にすごいと思っている私の気持ちは伝えたい。自分勝手だけれど考えた。私は、このことばならうれしい、相手を嫌な気持ちにさせないことばを考えた。

「あなたはいいよね。でも、私もそうなれるように努力するから見とって。」

これなら本当の気持ちを伝えられる。努力してなれた姿を分かってくれていると思える。それだけじゃなくて、対抗しようとしている分、私の気持ちもめらめら燃えてくる。

今の私は、友達に感謝している。そのおかげで言葉の大切さに気が付いたから。相手の気持ちを考えることもできた。自分が疑り深いこともよくわかった。心を表す私のことば。これからも相手にしっかりと贈り届けていきたい。

つながる

大塚中学校 3年 浅 沼 渚

渚さんは、いつも明るく努力家です。クラスや学年、後輩からの信頼も厚く、ほかの生徒の模範です。ハンドボール部のキャプテンとして活躍し、県大会出場を果たしました。何事にも高い目標をもって頑張っています。

中学校最高学年、3年の春。大塚駅で熊本地震災害義援金活動を行いました。私は、はりきっていて時間よりも早く来てしまいました。その理由は、生徒会執行部として初めての学校外での活動ということもありましたが、何より同じ日本人として熊本の人たちの役に立ちたいと思ったからです。ニュース

では、同年代の子やそれより小さな子が施設の手伝いをしている映像が連日映しだされていきました。また、夜テレビをつけると、「九州地方で震度5の地震がありました。」というニュースが流れ続けていました。

私のごろごろテレビを見ている間に、何千人、何万人、どれくらいの人が家や家族を

失って悲しみ、またいつ襲ってくるかもしれない地震におびえて生活しているんだろう。想像もできないけれど、他人事にはしてはいけなと強く思いました。

大塚中の生徒会執行部と今回一緒に活動する蒲郡東高校の生徒会執行部、全員が集まったところで募金活動が開始されました。「おはようございます。熊本地震の復興支援募金に、ご協力よろしくお願ひします。」がんばって大きな声で呼びかけました。しかし、まだ朝早い時間だったせいか、通りゆく人は眠そうで、すぐにホームへ行ってしまいました。その後も募金にはしてもらえず、とてもつらかったです。

そんな時、目に入ったのが、蒲郡東高校の一人の先輩でした。満面の笑みで呼びかけ、募金をしてもらおうと、「ありがとうございます。」と明るく笑顔で返していました。その高校生の姿は生き生きとしていて、さわやかな風が吹いたような気がしました。

それからは、私たちも明るく笑顔で活動しました。しばらくして、一人の男性が、「大塚中の子？僕も元大塚中生なんだよね。」

そう言って、笑顔で募金をしてくれました。普段とはちがう、特別なうれしさを感じました。初めて会った人でしたが、昔、私たちと同じ中学校で過ごしていたと思うとつながってるんだなと思いました。

その後、授業が始まる時間になりましたが、高校生の人たちは、まだ続けていました。私たちが帰るときも高校生の人たちは、「ありがとうございました。お疲れ様でした。」

と笑顔で挨拶してくれました。学校に戻るまで、とてもすがすがしい気持ちでした。

今回の募金活動を行って、私は「出会い」や「つながる」ことの大切さを感じることができました。一緒に活動を行った蒲郡東高校のみなさんや大塚中を卒業した先輩、募金に協力してくれたすべての方々がこの募金活動を通じて出会い、そしてつながることができたと思います。集まったお金が少しでも役に立つことが出来たなら、熊本の人たちともつながったことになると感じました。これからもこういった活動に積極的に参加していきたいです。



幸せはあたりまえじゃない

塩津中学校 3年 多田 キアラ

多田さんは、バレーボール部員として、中心になって活躍していました。明るく元気な性格で、クラスや学年内を和ませてくれます。学習係としての連絡や、当番活動も人一倍頑張っています。

あなたは今、幸せに暮らしていますか。毎日、好きなものを買って、好きなものを食べて、「おいしくない。」「もうあきた。」と捨ててしまっていないですか。

私は、去年、1 か月故郷のフィリピンに帰りました。そのときに見たフィリピンの人々の姿は忘れられません。おじいさんが片手に「お金をください。食べるものを買うお金がありません。」と書いた段ボールを持って、もう一方の手には、空き缶を持って、座っていました。そのおじいさんは目が見えなくて、服もぼろぼろ、日よけもなく、40 度を超える暑さの中で、車がすぐ横を通る道路の歩道に、段ボールを1枚敷いただけで地面に座っていたのです。私は、そのおじいさんを見てたまらなくなり、持っていたお金を渡しました。

フィリピンでは、働きたくても仕事がない人たちがたくさんいます。やっと仕事が見つかったも1か月に2000ペソ、日本のお金で5000円しかもらえない人もいます。もっと少ない人もいます。だから、食べ物を探してゴミ箱をのぞいている子どもたちを何度も見ました。道に落ちているペットボトルを集めて、それを売ってお金にする人たちもいました。

私の母も、そういう生活をしてきた一人です。祖母はいろんな仕事をして一日中働きましたが、給料は多くもらえず、7人の兄弟が1日何も食べない日もありました。魚1匹を家族で分け合って食べることもありました。母の兄弟で、学校に行くことができなかつた人もいました。病気になっても薬が高くて病院には行けず、亡くなった兄弟もいました。

あまりに生活に困ってある日、母は祖父に捨てられました。食べるものがなく他の人に拾ってもらった方が幸せになると、祖父は考えたようです。幼かった母は人混みの中で一人で泣いて祖父を探し回りました。結局、その姿を見ていた祖父は、母を連れて帰りました。もし、そのとき連れて帰ってくれなければ、今私はここにいなかったかもしれません。もし、フィリピンに住んでいたら、お母さんの子どものころと同じような貧しい生活だったかもしれません。今、私は、一日三食食べられます。気持ちのいいお風呂に入り、ふかふかのベッドでねむることができ、好きな物を買うことができ、きれいな服



も着られます。学校に毎日通って、友達と楽しく過ごしています。私の周りには物が十分にあり、家族の笑顔に囲まれています。でも、日本ではあたりまえの生活が、あたりまえではない子ども達もいるのです。段ボールにくるまって公園で寝ていたり、陽も差さない橋の下にしか家を持たない人もいます。

みなさん、普通に暮らせることが幸せであるということに気づいていますか。幸せは、本当は、あたりまえではないのです。自分の周りにある幸せを、ぜひ、見つけてみてください。

私が時代を変えていく

形原中学校 3年 小川 こなみ

こなみさんは、級長を務め、仲間から全幅の信頼を得ています。また、柔道家でもあり、県大会3位の実力の持ち主です。素直で優しく、笑顔が素敵なこなみさん。その人柄で、形原中学校を温かい雰囲気包んでくれています。

学校のアンケートでよく、「いじめを実際に受けたことがありますか。また目撃したことがありますか。」という質問があります。私は実際に受けたことがないので「ない」と普通に答えますが、もしも自分がいじめを受けていたとしたら…確実に「ある」と答えられるとは言えません。誰にも言えない悲しみや苦しみ、言ったらまたやられてしまうという恐怖があると思うからです。

「いじめにより自殺」そんなニュースを度々見かけます。悪気なく言っている一言、ちょっとした人間関係、そんなささいなことがいじめにつながるのではないのでしょうか。

私も小学校の頃、いじめを見たことがあります。グループで一人の女の子の消しゴムを奪い、ゴミ箱に捨てようとしていました。女の子は泣いていました。それがすごくいけないことだと分かっているのに、私は注意するのをためらいました。「助けてあげたい。でも、その後自分はどうなるんだろう。」と自分のことを考えたからです。それでも助けたかったから、「やめてあげなよ。」と伝えると、その子達は消しゴムを返しました。いつも話している友達に伝える一言が、とても勇気のいるものでした。でもその一言で友達を救うことができ、言って本当に良かったと思います。このことを通して、私は少し成長できました。困っている人を助け、笑顔にさせたい。そう思うようになったからです。

今年、私には一週間ほど入院している時期がありました。学校に行けない悲しさ、部活

の大会に出られない悔しさからマイナスなことばかり考えてしまう時間でした。そんな時、友達が花束やお菓子、私が忘れかけていた笑顔をプレゼントしに来てくれました。私は本当にうれしくて、こんな友達をもってよかったと思いました。もし私が、友達に冷たく接し、いじめをする子だったら、お見舞いには来てくれなかったでしょう。私もその友達が元気のない時、どうすれば笑顔にできるかと考え支えます。だから「お互いに支え合う」とはこういうことなんだと大切なことを教えてもらう機会でもありました。

自分はいじめなんてしない。自分はそんなの関係ない。そんな風に思っている人はいませんか？でも、いじめはとても身近に起きていることで、気付かないだけかもしれません。もしかしたら、気付かないうちにあなた自身が誰かを傷付けているかもしれません。言ってしまったこと、やってしまったことは元には戻りません。自分の発言や行動に責任をもち、お互いに支え合って過ごしていけば嫌な気持ちになる人がいなくなり、より良い人間関係を作ることができます。もし気付かずに誰かを傷つけてしまっている人がいたら、私はこのことを伝えてあげたいです。まず私自身が相手の気持ちを考えた発言や行動をし、それを周りにも伝える。そんな私の小さな取り組みが広がっていくことで、少しでも「いじめ」のない世界につながっていけばと思います。



言葉より大切なもの

西浦中学校 3年 尾崎 美月

美月さんは、前期学年代表者会の一員となり、学年、学級のリーダーとして活躍しました。合唱コンクールでは3年連続伴奏者を務めることになっており、今、一生懸命練習に励んでいます。

もし、皆さんが言葉を話すことができなかつたら、どんな方法で伝えるでしょうか。

私は小学校1年生のとき、かぜがひどくなり声が出なくなってしまうことがあります。声を出したくても出せず、ただうなずいたり、首を横に振ったりして自分の言いたいことを伝えていました。そのときは本当につらかったです。私はその頃から手話に興味を持ち始め、「手話ニュース」を見続けるようになりました。

あるとき、体に障がいのある一組の夫婦が出ている番組を見ました。だんなさんには耳に障がいがあり、奥さんには目に障がいがありました。互いに自分のできることをしながら支え合っている姿に心を打たれました。体に不自由なところがあっても、みんなで助け合っていけばどんなこともできるんだなと思いました。

その後、手話を体験する機会が二度訪れました。一度目は小学3年生のときです。学芸会で「小さな世界」を手話でやりました。とても印象的で、そのときの手話を今でも覚えています。私が特に好きなフレーズは、「みんなそれぞれ助け合う小さな世界」というところです。本当にその通りだなと思いました。人間はみんな一人では生きていけません。誰かがいてこそ、協力し合って物事を成し遂げられるんだな改めて感じました。

二度目は中学1年生でやった福祉体験活動です。福祉について学ぶために、自分の興味

のある講座を選びました。車いす、点字などいろいろな講座がありましたが、私は迷わず手話を選びました。その講座には、講師として実際に耳に障がいがあり、手話を使っている方がいました。最初に私たちは身近にあるものを手で表し、それを当てるというゲームをしました。私は電子レンジを手で表すことになりました。手で四角を作ったり、扉を開けたり閉めたりするという一生懸命やりましたが、みんなからは

「えっ、何？ 冷蔵庫？」

と言われました。確かに冷蔵庫も四角だし、扉を開け閉めするよなあと思いました。そう思うと、手だけで伝えるのはとても難しいことだと思いました。次に手話で自分の名前を伝える練習をしました。同じような動きがたくさんあって覚えるのが大変でした。でもそんなとき、講師の方が、

「大切なのは気持ちだよ。一生懸命に伝えてくれる姿を見ていれば、手話が上手じゃなくても気持ちを止められるんだよ。」

と言ってくれました。

手話は、障がいのある方にとって、大事なコミュニケーションの

手段です。でも一番大事なことは、相手に一生懸命伝えようとする気持ちだということに気付きました。私はどんな人にも「伝えたい」という気持ちが伝わるように心がけ、人



のために自分のできることを少しずつして いきたいです。

自覚を持って

中部中学校 3年 竹尾 歩 実

歩実さんは、思いやりがあり、自分の周りに困っている人がいると、さっと気づいて手をさしのべることができます。学級では、前期級長として陰日向なくリーダーシップを発揮しました。弓道部でも、積極的に仲間へのアドバイスをを行い、技術面だけでなく精神面でも大きな支えとなって貢献しました。

「先輩、ここ分かりません。」

中学3年生になり、「先輩」と呼ばれることが今までよりもとて多くなりました。2年生のときは困ったことがあると、3年の先輩に助けてもらっていました。しかし、私たちが最高学年になると同時に新しい後輩も増え、今まで以上に人から頼りにされる機会が多くなりました。

部活動では、自分が先輩方から教えていただいたことを後輩に正しく伝えることに苦しみました。体育大会の応援や合唱コンクールの練習など、私たちは事あるごとに先輩として見本となる動きを求められます。後輩に間違ったことを教えないために確認し直すことも何度もあり、その度に、人に教えることの大変さを思い知らされました。しかし、私の記憶の中の先輩方はいつも優しく、細かいところまで丁寧に教えてくださいました。そんな先輩方には、きっと「最高学年としての自覚」が強くあったからだと思えます。

今年の春、大きな地震に見舞われた熊本でも、人の役に立とうとしている人がたくさんいます。ある日、新聞の見出しに、「苦しいけど、役に立ちたい」と活動している子どもボランティアのことが書かれていました。記

事によると、子どもボランティアは小学生の子が始めたそうです。私たちと同じ年代の子や、それよりも小さな子たちが、自分も避難所で苦しい生活をしているにもかかわらず、避難所にいる方々のために支援物資を配ったり、トイレの水が流れるようにバケツで水を汲んで流したり、お年寄りの肩をたたいたり、いろいろな所でお手伝いをして、周囲の人に笑顔と元気を配っていました。苦しさに負けず活動する子どもたちの姿は、避難所で生活する皆さんにとって、きっと大きな励みとなったことなのでしょう。素晴らしいことだと思う反面、私は不安な気持ちにもなりました。もし、私が同じ状況に遭ったとしたら、同じように活動することができるのでしょうか…。

私たちの住むこの地域にも、大きな地震がいつ起きてもおかしくないと言われていいます。もし、地震が起こったら、私が通う中学校も避難所になります。今回、見本を示してくれた熊本の子どもボランティアのように、自分よりも大変な事情を抱えた方や弱っている人のことを心に留め、進んで周



りの人の役に立つ行動ができるような自分になりたいです。

今でも、熊本には私たちのような普通の生活が難しい毎日を送っている方もいると思います。部活動ができる幸せ、勉強ができる幸せ、当たり前の中学校生活を送れる幸せを忘れずに生きること。そして、自分が今できることを精一杯に取り組むこと。後輩だった

自分を支えてくれた、かつての先輩方や、熊本から私に、良い刺激を与えてくれた子どもボランティアに恥ずかしくない自分になる。それが、今の私の目標です。いつか、私の頑張りが他の誰かの支えや憧れとなって実を結ぶ。その日を信じ、目標に向かって頑張ります。

安心できる町へ

三谷中学校 3年 南本小夜

南本さんは、誠実な人柄で、責任感も強く、仲間から厚い信頼を得ています。剣道部の部長として活躍し、市内優勝に大きく貢献しました。前期は生徒会執行部として活動し、後期は副級長になるなど、よりよい学校を目指して日々活動しています。

安心できる町ってどんな町なんだろう。

そこらじゅうに警察官がいる町。車が一台も通らなくて、事故が起こらない町。それとも、悪い人が一人もいない町とか。人によって安心できるかできないかは、違うに決まっています。

ですが、自分たちの町に信頼できる人がたくさんいると、安心しませんか？「この人なら絶対にこんなことはしない」「この人なら大丈夫」って思える人が自分の周りにたくさんいると安心するはずです。

私は、去年、職場体験で市のデイサービスに行きました。そこには、「おはようございます」と言うと、「おはよう」と笑顔で返してくれる優しい人、将棋をやって負けて悔しがってる人、元気いっぱい、いろんな人と世間話をする人など、たくさんの方がいました。でも、その他にも、自分で上手く歩くことができない人、上手く喋ることができない人、立ち上がるのでさえ難しい人、そん

な人もたくさんデイサービスにはいました。もしこのような人が、一人で歩いていたとしたら、今の自分は助けることができますか？

「手伝います。」

「大丈夫ですか？」

と、進んで自分から、このような言葉を書けることができますか？なので、私は、信頼できる人がたくさんいれば、自然と安心できる町になるのではないかと考えたのです。

例えば、目が見えない人が歩いているとします。どこに誰がいて、どこに自分がいるのか分からない常態で、優しい声で、温かい声で、

「大丈夫ですか？」

「どちらに行かれますか？」

「段差があるので気をつけてください」

と言えば、きっとすこ

く安心するんだと思います。そんな小さな事



で？って思うかもしれません。ですが、目が見えない人にとっては必ず大きな救いになるはずです。

それに、目が見えない人以外でも、例えば車イスの方や、歩くことが難しい人に対しては、

「気をつけてください」

「荷物もちますよ」

「つかまってください」

など、考えればいくらでもできます。

それに皆さんの言葉で、行動で、不安でいっぱいだった事が安心に変わったという人が増えるかもしれません。

ですが、いざ、このような場面が来ても、今声かけていいのかな？とか、今助けた方がいいのかな？など思ってしまうはずです。私も同じでした。それでも、職場体験で、お世話になった市のデイサービスで、

「迷惑になってもいいから、進んで助けてください」

そんなことを言われたような気がしました。

それに、見て見ぬ振りが一番心に残っていく

と思います。なので、積極的に行動していけるといいです。

もちろん、お年寄りの方だけではありません。私のような学生や、小さい子、社会人、私たち一人一人が安心できる町にするためにも、信頼できる人を一人でも多く作り、自分が信頼してもらえる人になることが大切なのだと思います。

安心できる町

私たちの町が安心できる町になったら、どんな風になるのだろうか。

温かい町になるのだろうか。

いい人がたくさんいる町になるのだろうか。

お年寄りの方が元気いっぱいになるのだろうか。

それとも、信頼できる人がたくさんいる町になるのだろうか。

たくさんの温かい言葉で、たくさんの方が、安心して、生活できる町になりますように。

命の大切さを考える

蒲郡東高等学校 2年 平松 唯

平松さんは、前期生徒会会長として学校をよりよくするために尽力してきました。文武両道を信条とし、学業はもとより、所属する弓道部でも中心選手の一人として活躍しています。前向きで誠実な人柄で仲間からの信頼も厚いリーダーです。

命は、私たちにとってなくてはならないものです。私は高校生活で、日々の出来事を喜び、悲しみ、仲間と笑い合うことのおかげがえのなさを学んでいます。それは、私たちに命があるからこそ得られる経験なのだという

ことを感じます。

私たちは、多くの人に支えられて生きています。家族はもちろん、友達や先生にも。その支えの中で、不自由なく暮らす私たちは、時として、命の大切さを忘れてしまっている

ことがあるのではないのでしょうか。それを思うと、時に怖くなることがあります。私たちは、様々な体験を通して、命の大切さを学びながら、日々の生活を送っていかねばならないのではないのでしょうか。

世の中には、生きてくても生きられない人たちがいます。それがどれほど悔しいことか想像するだけで胸が詰まります。ニュースなどで、自ら命を絶った人の話を耳にすると「両親から与えられた命なのに。簡単に捨てないでほしい。」と、辛い気持ちになります。

私は、女優の小林麻央さんが乳がん罹ったというニュースを見て、感じるがありました。がんは転移すると重度の障害を伴う場合や、死亡に至る場合がある、恐ろしい病気です。麻央さんのニュースを聞いたとき、彼女の立場になって考えました。闘病中は、前向きに物事を考えたり、客観的に自分を見たりすることが出来ないのではないかと考えました。しかし麻央さんは、がんである自分を受け入れ、「なりたい自分になる」と決意し、日々を送っているそうです。その闘う姿に、私は心を打たれました。そこに、家族のため、自分のために必死に生きようとする姿、命の大切さを見たような気がしました。

このように必死に生きている人がいる中

で、人が人の命を奪うという痛ましい事件も世間では起きています。相模原市の障害者施設で起きた無差別殺傷事件は、衝撃的でした。容疑者は「障害者がいなくなればいい」と供述したということです。私はそれを聞いて、強い憤りと悲しみを感じました。同時に、人の尊厳、命の重さ

について、もっと大切に考えるべきなのではないかという思いを、



より強く持つようになりました。

私たちは、命とともに生きなければなりません。突然失われてしまう命も、残念ながらあり、どうなるかは私たちには分かりません。だからこそ私たちは、「ひと」を大切に、思いやりを持って生きていくべきなのではないのでしょうか。私にできることは些細なことです。しかし、みんなですればきっと大きな力になると思います。感謝の気持ちを忘れないこと。困っている人に声をかけること。みんなで話し合うこと。私に出来る小さなことを、大切にしながら生きていこうと思います。

大好きな蒲郡と私

蒲郡高等学校 3年 松本伸二

松本くんは、明るく優しい性格で、クラスのムードメーカー的存在です。ソフトテニス部の部長としても活躍し、真剣に練習や試合に臨み、県大会出場も果たしました。高校3年生の今は、進路実現に向けて頑張っています。

私は今、蒲郡高校の3年生です。あっという間に充実した時間が過ぎてしまいました。

最初に私が蒲郡高校を愛してやまない3つの理由をお話したいと思います。

1 つ目は、勉強と進路実現のために熱心なところ です。私は今、大学進学を目指し勉強をしています。そもそも私は間違っても勉強が得意とは言えず、クラスの仲間と比べても勉強をするほうではありませんでした。しかし今は、同じ志を持った仲間もいて、お互いに切磋琢磨しながら勉強しています。そもそも私は入学当初は大学には進学するつもりではありませんでした。蒲郡高校の中にあるビジネス系列を選択し、卒業後は地元の企業に就職したいと思っていました。しかし、蒲郡高校で学校生活を過ごす中で、先生方をはじめとする、様々な人との出会いが、私が進路について真剣に考えるきっかけになりました。そして、今は、私の夢の実現に向かって日々努力しています。

2 つ目は、蒲郡高校は部活動がとても盛んなところ です。どの部活も熱心に活動しています。運動部のみならず、文化部の活動も熱心で、本校の美術部は全国大会にも出場していますが、本年度は全国大会の中でも総理大臣賞を受賞した生徒もいます。私もソフトテニスに熱心に打ち込み、部長も務めました。しかし、プレー以外の面での悩みはつきませんでした。

部員同士でまとまらないなど、様々な問題が起こりました。しかし、それをみんなで乗り越え、県大会にも出場することができました。県大会に出場したことも大切な思い出になっていますが、それよりも、日々の活動の中で、顧問の近田先生と一緒にメニューを考え、様々な場面でアドバイスをくださり、寄り添って指導して下さったことが私だけでなく部員一同の一番大切な思い出になっています。私の所属する部活だけでなく、

様々な部活動に所属している仲間が一生懸命活動しており、その仲間からもたくさんのパワーをもらっています。

3 つ目は、蒲郡高校はどんな行事にもみんなで盛り上がるができることです。学校では体育祭、文化祭を始めとする様々な行事があります。その中でも私が一番思い出になっているのが、文化祭でのコーヒークップ作りです。これは、あの遊園地にあるコーヒークップの遊具をまねたもので、動力は人の手で回すというものです。しかし、この遊具に乗った生徒のみんなは本当に喜んでくれました。こんなに盛り上がるとは思ってもみませんでした。人を喜ばせるということがこんなにも楽しいものとは思いませんでした。私にとって、本当に忘れられない思い出になりました。

私が今あげた 3 つのことに共通しているのは、人と人が関わること



ということ、本当に素晴らしいものだと思います。そして、私は最近よく考えることがあります。それは、この蒲郡高校で学んだことを元に、もっと勉強し、この地域を盛り上げる人になれるだろうか？私の過ごしている大好きな蒲郡高校は3年間しか過ごすことができません。しかし同じように大好きな蒲郡の町は、この先ずっと関わることができます。私一人では難しいのかもわかりませんが、今抱えている問題、例えば、人口減少や教育のこと、地域が抱える様々な問題を知り、少しでも解決できる人材になり、今よりもっと素晴らしい町になるよう、たとえ微力でも、全力で取

り組める、そんな大人を目指していきたいと思っています。

知ること

三谷水産高等学校 3年 後藤 さつき

後藤さんは、天真爛漫で礼儀正しく、多くのことに興味を持って取り組んできました。観察眼や洞察力に優れ、日常生活や過去の経験から自己を見つめ、未来の自分へとつなげていく姿勢には目を見張るものがあります。

世の中には、「知ろうとしないことは罪である。」という言葉がある。それは、勉強においても言えることだと思う。

保育園の頃、私には仲の良い友人がいた。その子は生まれつき目の病気で、右目の視力はほとんどゼロに近かった。紫外線が目に入り込むと病気が悪化することと、外で遊ぶときは必ず帽子を被っていた。しかし、それだけでは気休め程度にしか防止できず、外にいられる時間は限られていた。そのため、大半の時間を教室で絵を描いて過ごす。彼女はあまり話すのが得意ではなかったが、いつも私の話を笑顔で聞いてくれた。私にとっては、そんな時間が心地よく、毎日一緒にいても飽きることはなかった。

小学校に上がると、彼女は特別支援学級に入った。私は、毎日昼休みに彼女のもとへ遊びに行った。やはり、遊べるのは教室に限られていたが、絵を描き、話をして笑ってもらえるだけで楽しかった。

そんなある日、同じクラスの子たちが「さつきちゃんって障がいのある子と仲良くして、良い子だと思われたいんだよね。」と言っているのを耳にした。私はそんなつもりは全く無く、ただ彼女といるのが好きだから一緒にいるだけだ、とすぐにでも反論しようと思った。しかし、当時の私の心は弱く、

反論したらクラスでの居場所が無くなるのではないかと危機感を抱いた。だから、その翌日の昼休み、クラスの子に

「外で遊ぼう。」

と誘われた私は断らなかった。大きな遊具で遊んだり竹馬に乗ったりと、教室ではできないことばかりで新鮮な気持ちになり、とても楽しかった。そして、この日から私は外で遊ぶことが多くなり、そのうち彼女のもとへ遊びに行くことはなくなった。

あるとき、廊下で彼女とすれ違った。私は普段通り挨拶したが、彼女は私を睨むだけで何も言わず通り過ぎてしまった。最初は、なぜそんな態度をとるのか分からなかった。しかし、段々と自分のしたことがどれだけ酷いことなのか分かってきた。私は自分のことだけを考えて、クラス

の子たちといることを選んだのだ。それも、彼女には何も言わずに。もう一緒に



絵を描くことも笑顔を見ることもできないと気づき、今さら自分がしたことを悔やんだ。誰に何と言われようと、彼女といる時間を大切にすべきだった。そもそも、友人と仲良くするのは当たり前なのに、どうして障害者だからと特別な考え方をするのかと、あのと

き反論すべきだった。彼女は目が見えにく
いけれど、笑顔が素敵でおしゃれ好きな、ど
こにでもいる普通の女の子だ。目に関するこ
とだけで彼女を特別扱いするなら、平均より
右耳の聴力が弱い私だって同じだ。それに、
何より彼女は

「絵を描くことで見えたという感動を残し
ておきたい。」

と言っていた。目が見えることを当たり前だ
と思っている人が多い中、それを大切にでき
る彼女の考え方は素晴らしいと思う。これを
知っても、あの子たちは同じことを言うだろ
うか。いや、言わないだろう。「知る」とい

うことはそれほど大きなことであり、人と関
わる上で大切なことだと思う。しかし、私は
彼女の良いところを「知っていた」のに言わ
なかったのだから、「知ろうとしなかった」
その子たちと変わらないだろう。

結局、彼女は中学に上がると同時に引っ越
してしまった。いつか、きちんと謝って、二
度と傷つけることがないように「知っている」
ことを大事にしていきたい。もちろん、今、
自分の周りにいる人のことも、もっともっと
知りたい。そして、今度こそ、自分の「知っ
ている」ことで大切な人を守れるよう強くな
りたいと思う。

